

「ボリス・ゴドゥノフ」(プーシキン)

一六世紀末のロシア。時の皇帝フョードルはロシアを強大な中央集権國家と爲したイワン雷帝の子だつたが、精神薄弱の爲、攝政ボリス・ゴドゥノフが事實上統治してゐた處、フョードルが死んだ。が、彼には子が無く、後繼たるべき弟ドゥミトリーは早く謎の死を遂げてゐたから、空位を埋めるべく、大膽な統治で人民に人氣のあつたボリスが帝位に即いた。とは云へ、成上り貴族ボリスへの大貴族達の反撥は強かつたが、ボリスは力で抑へ込み、反對勢力は國外に逃亡を餘儀なくされた。しかも、ドゥミトリー皇子の早過ぎる死は、實は帝位を狙ふボリスの仕業だつたが、それを知る大貴族シェイスキーはボリスを恐れ表沙汰にはしなかつた。

そして、皇帝となつて六年、ボリスはイワン雷帝の政策を繼承して奮闘するが、心に安らぎは得られない。權力も榮光も群衆の歡呼も心を樂しませてくれない。彼は思ふ、「健全な良心」さへあれば「現世の悲しみを和らげ」てくれるのだが、それに「たつた一つでも染がつけば」

大變だ、「魂は燃え盡き、心は毒物で満ち溢れ」る、ああ、「良心の汚れた人間」は何と「不憫なもの」か。

そんな折、敵國ポーランドにドゥミトリーを名乗る男が出現し、ロシア制壓を目論むポーランド國王を身方に付け、反ボリス勢力を糾合して攻め上らんとしてゐるといふ報告が届く。シユイスキーは、贖者に過ぎませぬ、眞の皇子は確かに棺の中に、と云ふが、ボリスは一人になつて獨り言つ、「ああ、苦しい（中略）、息をつかしてくれ」、全身の血が逆流する、詰りはあの弑逆ゆゑに、俺は十三年間、「始終殺された子供を夢に見たのだ」、だが、しかし、今、俺に齒向ふ敵は何者か？ 贖者の「空名、影」ではないか。そんな「幻」は「ふつと吹けば——たちまち消える」、さうだ、俺の子供達の爲にも「恐れは見せぬぞ」、だが、「ああ、王冠といふものは、重いもの」だ。

事實、ドゥミトリーを名乗る男は元は修道僧の贖者で、皇子の名を騙つてロシアの帝位を奪はうとしたのだが、ボリスの敵達にとつては、彼の正體が何であれ、ボリスを倒す「戦争の口實」として都合な存在なのであつた。かくて戦端は開かれるが、ボリスは戦争指導の最中にも皇子殺害の良心の呵責に悶え續け、突如、口や耳から血を吹出して卒倒する。だが、傍にゐる息

子に向ひ、俺には「お前の方が魂の救ひより大切に感じられる」とて、いまは今際の際にも皇帝としての心構へを教へ諭し、最後に俺の「罪業を許してくれ」と云つて事切れる。が、やがて信頼した司令官の背信などもあつて、ゴドゥノフ王朝は崩潰し、ボリスの息子は毒を仰いで死ぬ。

ロシア近代文學の父プーシキン二十七歳の時の戯曲である。野望や恐怖の虜となつて、互ひに利用し利用されるだけの政治的動物どもの跳梁するさくばく索漠たる世界にあつて、主人公ボリスが讀者の胸を強く打つのは、正にその強烈な道德的葛藤ゆゑに他ならない。無論、人間は誰しも政治的動物たる事を免れない。ボリス自身、野望に押流されて弑逆者となり、権力者となつた。が、他の登場人物達と異り、彼のみは内なる己れと眞摯に向き合ひ、道德的存在としての人間の人間たる所以を證するのだ。

プーシキンはシェイクスピアを大層好んだといふ。いかにも弑逆者ボリスの背後には弑逆者マクベスがある。そして、人間が人間である限り、ボリスやマクベスの悲劇は無くならない。惡と知りつつ惡に溺れ、おぼ道德的葛藤に足掻き、「ほんの自分の出場のときだけ、舞臺の上でみえを切つたり、喚いたり、そしてとどのつまりは消えて」行く「あはれな役者」(「マクベス」、福田恆存譯)、それが人間だからである。

(佐々木彰譯、岩波文庫)